シンポジウム　われわれの時代にとって舞踊とは何か

舞踊をめぐる思索の出発

古井戸秀夫・丸茂　祐佳
板谷　　徹（司会）

今回のパネルディスカッションは，「われわれにとって舞踊とは何か」の第五回，「近代舞踊の出発　5」として，わが国で実質的な舞踊研究の先駆者となった小寺融吉をテーマに取り上げた。

パネルディスカッションは，丸茂祐佳の「小寺融吉の舞踊研究」，古井戸秀夫の「小寺融吉の方法－翁を中心に－」と題する報告を承け，両氏に司会として板谷が加わって行われた。

まず，小寺の試みた日本舞踊の型の記述についてそれを舞踊譜へと展開させる内容の丸茂の報告について，そのような小寺の舞踊学の成立に関与した当時の外国の研究書として，市川雅からモーリス・エマニュエル，エルンスト・グロッセ，クルト・ザックスなどの影響が指摘された。それらの研究書から舞踊研究の方法を摂取した小寺は，『舞踊の美学的研究』のなかでまず舞踊の動きを体操的動作，儀式的象徴的動作，日常生活中の動作，装飾的動作に分類することを試みたが，芸の世界の語彙による玄人的議論ではなく，日常の語彙による素人的感覚で舞踊学を構想したのではなかったのか。

このような発想による動きの分節と舞踊譜についての小寺の仕事は，東京国立文化財研究所の『標準日本舞踊譜』に最も良く継承されたが，科学的体系的なメスを入れようとしたこの試みは，続いて具体的な作品分析に応用されるはずであったが実現しないままであり，基礎的なこの仕事を利用した研究の出現を待つという意味の，この仕事に携わった横道万里雄の発言があった。この場合，舞踊譜の譜語にあたるものは日本舞踊の動きの本質がいわば「当て振り」にあるところから文学的な述語を用いることになる。

技法の体系はその舞踊の世界や人間の捉え方と密接な関係があり，文学的述語が日本舞踊の譜語となるのも，日本舞踊の本質に根ざしたものであり，小寺が日本舞踊の型の記述をそのような言葉で実現しようとしたことは，あらためて評価し，検討して，継承する必要があろう。

次に能の「翁」の動きの意味するところを述べられた古井戸の報告に対して，神事猿楽のなかで神や仏の化現の器となっていた翁が，神や仏の化現を問題としなくなる，舞台芸術となった段階での演出で，型の意味を検討するのはいかがかという司会者の質問に対して，研究の立場の違いであるとの報告者の答えがあった。この議論は，小寺の舞踊の動きを考える視野あるいは背景といったものを考える方向へ展開させるべきものであったが，司会者の不手際で果たせずに終わった。舞台芸術となった舞踊と，いまだ信仰的民俗的要素を残している舞踊との，型あるいは動きの理解という大きな問題をはからずも提起することになり，この点でも小寺が読み直されるべきであろう。

なお同氏の報告のうち，現在では失われてしまった「翁」の笑いの要素の指摘は，詞章からも窺える興味ある点であるとの，能楽研究の羽田昶のコメントをいただいた。

二氏の報告はそれぞれ小寺を充分に意識しながらも，話の内容はやや小寺を離れたところで行われたために，それを小寺の舞踊研究とうまく関連づけさせることが司会者の力量では難しかった。ただし，両氏とも舞踊の型あるいは動きの解釈や記述の問題を関心の中心とするところは，小寺への的確なアプローチであったろう。

ただし，小寺はそのようなもっぱら分析的な視点，仕事にとどまることなく，例えば日本舞踊の稽古が一曲丸ごと習うのを常として分析的な稽古法を採らないといった舞踊の捉え方を，小寺は夫人の清水和歌さんから影響を受けて持っていたのではないか。要素のみにとらわれて全体を見失い，分析的作業と舞踊から享受する感動とが別のものになってしまう誤りに陥ることがなかったのが小寺融吉ではなかったのかという，結論とすべき発言が，松本千代栄からあり，パネルディスカッションを終えた。

（文責・板谷　徹）

＊1991年度春季第31回舞踊学会
『舞踊學』14－2号より転載